



第6図 結果の例 図中の数字は釣獲率
 浮縄25m 幹縄50m シヤ縄20m
 釣元ワイヤー3m (推定釣鉤深さ90~160m)

5 エンデバー号乗船記 (カナダ便り)

関 文 威 (Biol. St., Nanaimo)

パーソンズ博士を中心に結成されている我々海洋生物学グループは、水産海洋学の立場から、食物連鎖の基礎データを集めることを主目的としている。もちろん、University of British Columbia等近隣の研究機関とも共同でこれに当たっているが、我々のグループ内だけでも、各分野の専門家が集まっているような角度から一つの現象を同時に見ようと努力している。あるものは、未だ試験研究の段階であるが、可成りのものはすでにルーチン化され、いろんなフィールドでどンドン機械的にデータがとられている。

大きな研究計画の一つに、Strait of Georgia の調査があり、数年にわたって観測が行なわれたが、1967年で一応調査は終了した。私にとって、10月末の調査航海に便乗する機会を得たのは幸であった。このシリーズの観測には、2, 3の研究船が用いられたようだが、私が上船した時は、海軍所属の Endeavour 号が、Pacific Oceanographic Group 専用に用船契約してあった。この船は、Pacific Naval Laboratory, Pacific

Oceanographic Group, Institute of Oceanography of University of British Columbia, Department of Mines and Technical Surveys 等の研究所の要求に応じて使用される性格上、Underwater Acoustic, Geomagnetism, Submarine Geology, Physical Oceanography, Chemical Oceanography, Biological Oceanography の調査に必要な研究設備をもっている。その他、航海毎に特殊な装置を多数持込めるための空間的配列と、装置着脱の便宜には、多くの配慮がはらわれているのを感じた。1,560排水トンの船であるにもかかわらず、ヘリコプターの発着装置があるのは注目に値すると思う。

観測は昼間だけ行なわれる。調査計画の打合せの時、日本的感覚で、なぜ夜間も調査しないのかと質問したら、ギョッとしていたようだが、しばらくして、もしもお望みならば夜間作業もやりましょうと言われて、かえって閉口した。カナダ人は、研究も楽しみながらやっているようで、これは非常に良いことだと思った。

基本的には、科学者は試験段階の調査研究だけをやり、ルーチン観測はすべて技官によって行なわれているようである。また、ルーチン観測の結果討議及び印刷公表の段階では、科学者も参加することもあるが、大抵は技官だけが責任公表をしているようである。私も、数年前から計画していた試験的な調査研究を行なったが、後でP O Gの海洋物理学の人と研究結果の照合すると、極めて海洋物理学の理論と一致するという点で興味をもたれ、その後も、しばしば物理学の人がデータ参照に来られた。一応調査は成功したものと考えられるので、他の基礎研究結果と合わせて、近いうちに、米国の雑誌にて印刷公表する予定である。

食事の時は、士官は制服、研究者と技官はネクタイをして上衣着用の食堂に出なければならない。しかし、のんきなカナダ人の中にはこのシステムを面倒に思う人も居るようである。顔中鬚の技官ケネディー氏は、ワイシャツにペンキでネクタイの絵を画いて、ニコニコしながら食事に出て来たのにはおどろいた。それを見て、シカメツラをする人、ニヤニヤする人、様々であった。

"When not working the scientists should be sleeping." という海洋学者のための古語があるように、居室には非常な考慮がはらわれている。私に与えられた個室には、机、ベッドがあることはもちろん、専用のバス、トイレ付きのデラックスなものであった。

乗組員には、愉快な人が多い。船長がいつも難かしい顔をしているのと対照的に、一等航海士は船中で最も陽気な男で、相手かまわず常に大声でしゃべりまくり、私もしばしば話相手に掴まった。私の実験操作の一挙一動を、だまって詳細に見ていた機関長は、二・三日目からついにシビレを切らして、何だかんだと質問を始めた。微生物学の仕事に最も関心をもつ乗組員が、洋の東西を問わず、常に機関長であることは興味深い。フィンランド生れの操機手C氏とは、特に親しくなりよく話をしたし、港に入ると一緒にビールを飲みに行ったりした。彼等下級乗組員は、カナダ海軍に登録されていて、航海毎に雇われることも彼から教わった。非常にタフな男で、飛行機の操縦免許、スカイダイビングの免許、スキンドайビングの免許等、免許証をサイフばいりに持っていて、次々と自慢して見せてくれた。彼の話すキング島の原始人の話、エスキモー人との生活の話等は、漫画

のようにこっけいであった。

エレクトロニクス関係の若い乗組員から「ドクターユダを知っているか」と質問を受けた。「ドクターウダのことか。」という、「皆、ドクターユダだと言っている。日本から数年前にナナイモ生物研究所へ来て講義をした偉大な海洋学の教授のことだ。」というので宇田先生のことだとはっきりした。宇田先生は、ナナイモの市井の徒の間でも極めて有名で、驚くことがしばしばある。

非常に楽しい観測の日日だったので、一週間の調査期間は、アッという間経ってしまった。下船の時、日本の慣習通り、ブリッジの船長に挨拶に行くと、始め驚いていたがすぐ大いに喜び、「ぜひ又、乗船して下さい。」と握手を求められた。カナダでは、研究者は下船の時も普通挨拶に行かないものだと後で聞いた。

6 山口県定置網漁撈長、船長研究会に出席して

小川 嘉彦（山口県外海水試）

山口県の日本海沿岸の定置網で直接海と網と魚群を相手に仕事をしている漁撈長、船長クラスの人達の研究会が昭和42年12月12日に萩市で開かれた。この会は水試の藤井泰司研究員の努力が実ってはじまったもので今回が2回目という新しい会であるが、この会に出席したので席上漁業者の方々が語ってくれたブリ漁況の話など聞いたままここに記し、御参考に供したいと思います。

1. ブリは沿岸を南下（または北上）してきて定置網に入るのではないように思われる。むしろ何かの原因で沖合から差し込んで来て定置網に入る。
2. 定置網で漁獲されるブリには回游群と瀬付群と2群存在する。回游群は体長、体重等大きさがそろっているが、瀬付群は大小いろいろ混ってばらつきが大きく、イワシ類を追って入網する場合が多い。量的には回游群が多い。
3. 釣でブリが獲れる時には定置網には入らない。逆に定置でブリが獲れる時には釣でとれない。
4. 定置網に入るブリの大きな魚群は空胃の状態のものが多く、何か食べているものは網を揚げるときはき出すのでわかる。食べているものは、冬にはイカ類、春にはカタクチイワシ、キス等が多い。
5. 冬のブリは滞留期間が短かく足が速い。春漁の方が漁の続く場合が多い。
6. 漁が続くか続かないかは漁場付近の地形（例えば湾の大きさ等）にも関係する。
7. 冬のブリ漁は北西の風の時に好い。春のブリ漁については特に風について言わない。
8. 潮流に対する風の影響は大きく、漁場付近では底層まで風潮が流れる。西風のときは満潮が長くかつ強く流れ、北風の時には干潮が長くかつ強く流れる。
9. 普通には干潮時にブリの入網が多いように思われる。
10. キレシオー大潮の終り一頃に漁が好い。大潮時には漁獲が少ないがこれは網成りが悪くなるため大潮の時には魚群はよく動く。
11. シケの前にはシケジオ（流向不安定なかなり強い潮流）が流れ瀬付の魚が多く入網する。
12. 網に入ったブリは潮上にのぼるようである。